

【 講演講師プロフィール 】



ソドブジャムツ・フレルバートル (SODOVJAMTS Khurelbaatar)

駐日モンゴル特命全権大使。

1951年10月17日生まれ。モンゴル国ウランバートル市出身

1976-1981年 外務省 アジア局職員

1981-1987年 駐日モンゴル国大使館 理事官・三等書記官

1987-1989年 外務省 アジア局 二等書記官

1991-1996年 外務省 アジア・アフリカ局長

1997-2001年 駐日モンゴル国特命全権大使

2002-2005年 外務省 政策企画・情報・評価局顧問

2005-2008年 外務省 アジア局長

2008-2011年 駐朝鮮民主主義人民共和国モンゴル国特命全権大使

2012年1月より 駐日モンゴル国特命全権大使

モンゴルと日本の話ができますことを大変光栄に思います。こういうチャンスを作って頂いた斎藤勁先生にも敬意を表したいと思えます。斎藤先生とは野田政権の内閣副官房長官を務めていた頃に知り合って、夫婦同士友人関係にもなっている大変素晴らしい方あります。今日は、是非皆さんに日本とモンゴルの話をしてくださいと言われて参りました。

日本とモンゴルの間に外交関係が樹立されたのは今から43年前です。43年間の前半20年間は、モンゴルのイデオロギー・社会体制は日本と異なる共産圏の国であったため日本とモンゴルの関係が大きく発展する可能性は限られていました。しかし、今日の良い関係の基盤はこの頃にできています。両国の関係が本格的に急速発展し始めたのが今からちょうど25年前、モンゴルが共産主義を拒否して民主主義の道を歩み始めて以来です。今、両国関係は一番良い時期です。皆さん覚えていらっしゃると思いますが、先週安倍首相が中央アジアの5つの国を訪問する途中でモンゴルに立ち寄っていきました。わずか4時間の訪問ですが、その意味と意義は大きいのです。これについて菅官房長官が記者会見で、モンゴルは日本のかけがえのないパートナーで、首脳と首脳の信頼関係を通じてモンゴルと日本の戦略的パートナーシップを強化していきたいと述べました。それは、両国の関係のレベル・雰囲気や今回の安倍さんのモンゴルへの執務的訪問の意味と意義を表すものだったと思います。

モンゴルと日本の関係ですが、この25年間で大きく変わりました。30年前、日本を見るモンゴルの人たちの目はとても厳しいものでした。日本は悪い国で、1939年にノモンハン事件を起こし、モンゴルの独立をなくそうとした侵略者である。日本は怖い国で、

アメリカ帝国主義と組んで軍備拡張をやろうとしている悪くて怖い国。そういう目で見えていたのがわずか30年前のことです。それが両国の関係が急速発展し始めて以来、25年で180度変わりました。各分野において両国の関係は変わってきました。20年間はまず総合的パートナーシップという原則のもとで。そして、今のモンゴル大統領のエルベグドルジが1991年の11月に本国を公式訪問した時、次の新しいステップ戦略的パートナーシップ関係に移っていきましょうという合意をしてからは戦略的パートナーシップを実現させるために今は両国が頑張って大きな成果を上げている最中であります。

日本とモンゴル関係は大きく変わっています。私の考えでは今まで25年間の一番の成果といえば日本に対するモンゴルの考え方が変わったことです。モンゴルの人々の気持ちを私は3つのKと言っています。それは日本の皆さんが使い慣れた3つのKの反対です。まず感謝です。次に关心です。そして期待です。モンゴルは1990年の3月、若者を中心に民主化運動を広めました。そしてわずか半年の間で当時の共産党を倒して多政党の制度を作りました。初めて民主主義的な選挙をしてから、ちょうど今年で25年経っています。

モンゴルの経済的な柱は、牧畜産業と農業、その原料を加工する軽工業だけでした。しかし、その経済も7割はソ連・コメコン諸国の援助と借款で存在しており、モンゴルが民主化の道を歩み始めるとその援助が一日ストップしました。その際、モンゴルの経済も止まってしまって、人々の生活は非常に困ったのです。その時、モンゴルの民主化を応援・支援してくれた国々の中でいち早く手を差し

伸べてくれたのが日本でした。日本はモンゴル民主化当初の困難を無事乗り越えるために、またモンゴルの経営を地下主義経営から地上経済へ移行する段階で、最近では新しい発展の基盤作りにどの国よりも積極的な協力をしてきたのです。20年間の海外からの支援の半分は日本単独でした。我々が苦しんだ時に助けてくれたのが日本ということで、モンゴルの人々は感謝の気持ちでいっぱいでした。だから、1番目のKは感謝の気持ちです。2番目のKは関心です。我々を救ってくれた日本、日本人はどういう国なのかという関心が国民の中で高まってきました。日本のことをできるだけ詳しく知りたい。日本に行って留学したい。日本と何らかの協力関係を持ちたいという関心もたらされました。3番目のKは期待です。モンゴルはこれからの国です。新しい発展のスタートが始まったばかりの国です。新しい国作りで1番期待しているのが日本です。最近15年間、毎年モンゴル国内では世論調査が行われています。1番好きな外国のトップは日本です。そして、これから1番期待できる国のトップも日本です。これが日本の皆様に対するモンゴルの人たちの気持ちです。これが日本とモンゴル関係の1番の成果ではないかと私は思っています。

日本に感謝を表し、また期待しているモンゴルという国はどういう国なのか。モンゴルは中央アジアの中心地に、北がロシア、南が中国という世界で1番大きな国と2番目に大きな大国に挟まれて存在しています。面積は日本の4倍です。しかし、人口は60分の1です。そのモンゴルは古くて若い国です。古いというのは今から約2220年前にモンゴルの初めての国家フンヌという国ができた歴史があります。それをモンゴル系、トルコ系、中央アジアの遊牧民たちの国家でモンゴル人が中心となってできた国家であります。

13世紀にはチンギス・ハンが作ったヨーロッパとアジアをまたがるモンゴル大帝国ができた歴史があります。従いましてモンゴルは古い国です。

この古い国は若い国になりました。旧ソ連の衛星国になってやっと共産主義を拒否したのが今から25年前の出来事ですので、古くて若い国というのはそういうことです。この若い国はまた若者の国です。人口はわずか300万人ですが、7割は35歳以下の青少年です。だから、若者の国であります。歴史では様々な出来事がありました。将来は明るいです。地下資源が大変豊富な国で、伝統的な牧畜産業、農業の近代化、そして地下資源の開発、それを必要としているインフラストラクチャーの整備。何よりそれを動かすヒトづくり、若者たちの育成、そういう課題をもって、新しい発展へ今スタートした国であります。

ここでもう一つの特徴を簡単に説明したいと思います。モンゴルは民主化前までは、社会主義国家でした。旧ソ連に引き続き、2番目の社会主義国家として70年間の歴史を経てきました。しかし、それはモンゴルの人々がなりたくて共産圏の国になったわけではないと皆さんに是非わかっていただきたい。これはモンゴルの独立を維持・保全するためのやむを得ない選択であったということであり、13世紀は大モンゴル帝国でした。その後、チンギス・ハンの息子たちや孫たちの、権力闘争によって大帝国を小さなたくさんの王国に分けてしまいました。それで、17世紀に弱くなったモンゴルのたくさんの王国を満州の国が100年間かけて一つ一つ征服したのです。13世紀の初め頃、モンゴルが世界の地図から消えてしまう悲劇もありました。300年間、満州の国に倒れていたモ

モンゴルは1911年に中国と共に辛亥革命を起こしました。それでモンゴルが復活を宣言するチャンスを得たと喜んでいたら、今度は中国がそれを承認してくれません。もともとモンゴルは中国と満州のもとで一緒の国だったので、中国の一部であり、独立はないと言うのです。モンゴルの愛国者たちはそれに反対し戦っていましたが、ロシアと中国はモンゴルを引っ張って1915年にキャスティンという話し合い・交渉を通じて、やはりモンゴルの独立はない、中国の一部で中国の自治区であるべきという決定をいたしました。モンゴルはそれを認めず戦いつづけていると、中国は1919年にモンゴルに軍隊を送って征服しました。そうしたら、北の隣国のロシアに10月革命が起こり、内戦が行われます。白軍が逃げてモンゴルに入ってくるのです。それが中国の軍隊が入ってきて1年後の1920年の出来事です。それで、モンゴルが中国・ロシア2つの国の軍の圧迫のもとにまた倒れるのです。1921年にモンゴルの愛国者たちがソビエト・ロシアに軍事援助を求めます。おたくからきた白軍を追っ払ってくれませんか。中国の軍隊もついでに綺麗に追っ払ってくれました。それで真の独立を獲得することができたと喜んでいたら、また大変なジレンマ・選択の直面されてしまうのです。

今度はロシアが共産主義にイデオロギーを押し付けてくるのです。それをモンゴルは受け入れました。受け入れたのはモンゴルの独立を維持・保全する唯一の方法であったためです。共産主義などモンゴルの人々には分かりません。19世紀の初め頃、ヨーロッパで生まれたマルクス主義・共産主義というイデオロギー、労働者階級の思想が、遊牧民のモンゴルに通用する訳がありませんでした。しかし、モンゴルが直面した選択とは、もしソ連が押し付けてきた共産主義

を受け入れなかったら中国のもとに戻ってしまうというものでした。そんなことを希望する人は1人もいない。共産主義が何かわかりませんが、中国の一部であるより、ソビエトに比較的依存性をもちながら、国の独立を維持・保全していくチャンスではないかというやむを得ない選択でモンゴルは共産圏の国になってしまうのです。

やっとなソ連にゴルバチョフが出てきてペレストロイカの政策を行うと、モンゴルの若い人たちを中心にチャンスは是非利用すべきだと言って民主主義の運動が起きました。この70年間モンゴルは黙って共産主義を認めてきたかというのと違います。10年ごとに反体制運動を行ってきました。厳しくそれぞれ悲劇もありました。例えば、30年代の半ば頃、モンゴルの歴代の4人の首相が旧ソ連に連れ去られて死刑にされ、大臣クラスの20名にも刑が執行されました。当時のモンゴルの人口はわずか70万人しかいませんでしたが、そのうち3万人が反体制分子ということで処分されたのです。大変な悲劇でした。そして、40年代の終焉、50年代旧ソ連のスターリンの個人崇拜の期間、また60年代の半ば頃にそれぞれ共産主義体制を反対する動きがありまして、激しく打壊されてきた悲劇もありました。それで、ゴルバチョフが登場してモンゴルにチャンスを与えて、じゃあ我々も民主化を目指して運動しようとした青年たちがハンストを起こして、共産党との交渉に成功して、共産党を倒したのです。それによってモンゴルが民主化を始めて以来、25年経っています。

モンゴルの民主化の特徴は、政治と経済の改革を同時に実現してきたということなのです。当時、モンゴル国内でも、国外でも、モンゴルのように発展レベルの低い国が、政治と経済の改革を同時にするのは不可能である。皆さん、まず政治的なところから始めたらどうですかというアドバイスもありました。しかし、当時のモンゴルのリーダーたちは勇気をだして、同時にやろうと頑張って今日のモンゴルになったのです。簡単ではありませんでした。25年間、共産主義を倒すだけで、後はもう棘を抜いたように簡単にうまくいくとみなさん甘く見ていたのです。政治・社会的な改革は比較的うまくいきましたが、1番の問題点は経済の改革でした。たくさん間違いを起こしてしまいましたけれど、大きく前進して市場経済という目標を達成できました。こういう改革をやったときモンゴルの人たちの生活というのは本当に難しいものでした。インフレというのが社会主義時代から40%も増えてしまった。街の中は真っ暗で、市内の交通は止まってしまいました。マイナス30度の中で大変な生活を送ってきたのです。その頃、食料品・救援物資をたくさん送ってくれたのが日本でした。そして100台のバスをウランバートルに送って、火力発電所のリハビリもやってくれた。それで少し生活が安定し、発展へとつながっていったということです。それに限らず日本は、市場経済への移行期、つい最近までは新しい発展の基盤作りに大きく協力してくれました。世界銀行とともにモンゴルを支援する会議が10回行われまして、モンゴルを支援したい20ほどの国を調整してモンゴルを支援してきたのが世間と日本です。こういう日本だからモンゴルの人々の日本に対する気持ちが感謝の気持ちに変わったということです。

モンゴルの民主化のもう一つの成果はモンゴルの外交です。社会主義時代モンゴルは完全にクレムリンに依存して独自の外交がありませんでした。私は70年台の初め頃にモンゴルの外務省に入省しましたが、日本との関係を発展させたいと言ってもそれは難しかったです。なんでもソ連の指導で動く時期に日本とモンゴルとの関係を拡大することは不可能でした。幸い民主化のおかげでモンゴル独自の外交路線を持つことができました。この外交路線は我々の専門用語では、多元的外交と言います。それはバランスの外交で、世界のあらゆる国と平和的・友好的協力関係を発展させていくものです。そのなかで、外交路線の1番のプライオリティというのが北と南の2つの隣国とのバランスの取れた隣国関係ということです。過去の中ソ対立の時、モンゴルはロシアに向いてしまった。その前は、300年間満州に依存していたという教訓があります。それを考えたバランスの取れた友好関係というのがモンゴルの外交路線のプライオリティの一番の課題です。

これに負けない大事な課題としては、第3番目の相手を作っていくことです。それは1つの国ではありません。アジア太平洋の地域では、日本、アメリカ。それからヨーロッパ、国連。ロシアと中国とでバランスのとれる第3番目の相手になってほしいという課題です。25年経ってもまだ完全にそういうバランスはとれていませんが、大きくその課題実現へ前進したように見えます。ロシアと中国とは比較的バランスのとれた政治関係ができています。第3番目の相手の中で1番関係が成功裏に発展したのが日本です。そして、アメリカとヨーロッパとも悪くない関係です。つい最近9月にモンゴルの大統領が新しい提案を出しました。まだ審議中ですが、モンゴルのこれからの道は積極的な中立であるべきという提案です。

これは全く新しいことでもありません。今までの多元的外交、バランスの外交のロジックの続きになることです。なぜ中立的の話ができてきたかという、ロシアと中国の間に挟まれている地質的外交という位置から考えるとよくお分かりになると思います。2つの大国とは良い関係になったと思いますが、グローバルな問題で中国とロシアが1つになって関係が改善されて近づくとまたモンゴルには具合が悪いことなのです。

正直申し上げますが、みなさんご存知の通り、上海協力機構はその中国とロシア、カザフスタンが作りました。モンゴルも是非それに加盟して欲しいと、圧力が年々強くなっています。モンゴルはメンバーになっておりません。モンゴルはオブザーバーです。その圧力をもう少し和らいだものにしたということで、モンゴル大統領のイニシアティブで2年前からモンゴル、ロシア、中国の三角首脳会談を設置しました。それは、政治、安全保障問題、そして若干経済協力の問題を審議するメカニズムをしていますが、両国からの圧力が強くなっているため、モンゴルは中立を宣言せざるを得ない立場になっています。

今、国民の中で審議中ですが大統領がまた新しい法律案を作ってモンゴルの国会に提出しています。来年はモンゴルで中立外交がスタートするとおもいます。そしてモンゴルは北東アジアの一員として、地域の安全、経済に貢献できる国になりたいという政策もとっています。北東アジアは皆さんがご存知の通り、政治と安全保障については複雑すぎる、おそらく中近東以外では一番緊張が高い地域になっております。それで、モンゴルはこの地域の難しい問題を話し合いによって、一つ一つ解決していくのが本物じゃないかという

ことで、北東アジアのメカニズムを作ろうとしています。様々な構成、組み合わせやレベルでウランバートルを場所として提供して話し合いをしてほしい。そこで、ウランバートル対話と名付けてやりましょうと提案をしています。

この政策の枠の中で日本との協力もうまくいっています。日本とモンゴルは地域内の協力で、最近非常に活発に協力しあっています。まず、北朝鮮と日本の会談。今までモンゴルでは2回行われました。そして、毎年PM・MMの話し合い。外務省同士の政策対話を通じて地域問題、地域協力について意見の交換、情報の提供、そして協力関係が活発に行われています。また、モンゴルは自分の国を非核地帯と宣言した国です。1つの国単独では無理だ、不可能だとする意見はありましたが、モンゴルがよく説明したおかげで国連安保理がモンゴルの非核地帯のステータスを承認する意味の決議を採択してくれました。そのおかげで、モンゴルは武器に一切手を付けず、自分の国の安全を政治と外交手段によって確保することができました。自分で核を作りません。外国の核を入れません。モンゴルの領土へ核兵器を運びませんなどの制約はあります。それで、核を作ろうとしている国々である、北朝鮮、イランに対して、どうぞみなさんこの例に従ってくれませんか、長年核を作ろうと資源を使って何が良かったのですか。経済がダメになり、国民の生活が苦しくなって、兵器が増えてそれでいいのですか。モンゴルの例であろうと、国連や国際社会が歓迎して、逆に仲間が増えるのではないかと。安全保障も確固たるものになるのではないかとという説得をモンゴルは行っています。結果は0に近いですが意味があるから、我々は諦めずに説得を続けています。また、北朝鮮には経済改革をやりなさい。モンゴルは改革をして成功していますよ。みなさんに分かち合う経験を

たくさんしていますからどうぞ、教えてあげますという説得をしています。それが地域内の複雑な緊張を和らげ、そして地域内の経済を発達させるために行っているモンゴルの小さいながらの貢献であるとして外交を進めています。

モンゴルは今新しい発展を目指していると強調しましたが、どうい課題や目標を立てているのでしょうか。まずは、伝統的な牧畜産業と農業の近代化を考えています。そして、鉱物資源の開発が必要となるインフラストラクチャーの整備を考えています。鉱物資源というみなさん何があるのかと考えていると思いますが何でも出てきます。石油やダイヤモンドはないと言われていましたが出てきました。何より豊富なのが、石炭、コークス石炭、レアアースでどれもいっぱいあります。銅、モリブデン、金、銀なんでもたくさん出てきます。鉱物資源を開発し、その原料をさらに加工して製品化する。そのために、鉄道、道路、発電所などのインフラストラクチャーが必要です。何より大事なことは、若者の教育に力を入れていくことです。モンゴルは若者の国ですから、先の経済を動かす労働力を調整する必要があります。モンゴルに必要とされるヒトづくりを進めていくという課題を持って進んでいます。また、若干経済が困っている時期があります。5年前に、世界的に鉱物資源の価格が高騰した頃、輸出が増えてモンゴルの経済が17%も成長した時期がありました。しかし、モンゴル経済は鉱物資源に依存していたため、国際市場が悪化して輸出品の石炭とモリブデン、金、銀の価格が落ちると、輸出量も減りモンゴル経済の成長率が去年は7%まで落ちてしまいました。今年は4%しかないと言われ、経済を改善して頑張っています。それで、日本に対する期待も非常に大きいわけであり

今、私が戦略的パートナーシップと申し上げましたが、戦略的パートナーシップには5つの柱があります。まず、政治対話です。お互いをよく理解し信頼しあう政治関係を作っていきたい。これはうまく実現されています。齋藤先生が副官房長官の頃、モンゴルに正式訪問しました。その時、両国の政治対話を首脳レベルから様々な分野に拡大し強化すると同時に、地域内の協力関係も強化して経済交流に力を入れていく。それに日本が協力していくという話を中心に、野田政権を齋藤先生が代表して話を進めていきました。政権が変わっても、安倍首相は、首相になってわずか3ヶ月後にモンゴルを訪問しました。それ以来2年半の間に、首脳会談は10回行われました。安倍首相は日本の歴代首相でモンゴルを2回訪問した初の首相です。また、モンゴルの大統領も2年半で日本に8回も立ち寄って首脳会談を行っています。その他にも、国連やヨーロッパ、国際会議の場でも会談を行っています。そうすることで、両国の首脳の間非常に親しい関係ができました。他の中央アジアに行くときにモンゴルに立ち寄ったということは、両国の関係が非常に親しくなっていることの表れではないかと思えます。

あとは、防衛、外交、安全保障問題を審議するPM・MMを、日本は16カ国でミーティングしていますが、モンゴルとも2回やっています。その時は局長レベルでしたが、今は次官レベルまで上げているところです。外務省同士も10何年間政策対話をやっています。安全保障分野においても交流を始めました。齋藤先生が副官房長官の頃、日本の石川防衛大臣がモンゴルを訪問しました。モンゴルの防衛大臣や参謀本部長、陸軍司令官も次々に日本を訪問しています。日本からも同じレベルで訪問し、PKOの機能を高めるために、モンゴルと日本の軍事協力をPKOの枠の中で強化することで、日本の自

衛隊が災害のときにどう活動しているか、その能力・技術をモンゴル軍に教えていくなどして協力関係が深くなっています。そして国会と国会の直接交流。特に議連関係の交流をしており、毎年外交団を交換しています。こういうことで、政治対話が活発になって、お互いを理解し信頼できる政治関係という面で大きな前進をしています。

次の柱は経済・貿易です。今、両国の貿易金額は少なく、わずか5億米ドルほどです。日本からの直接投資は2.5億米ドルで、お互いが持つ可能性を見ると大きく遅れています。しかし、経済交流を発展させ貿易を拡大しようと、最近は何年頑張ったおかげで少し変わろうとしています。まず、法的整備に力を入れ、今年の1月にEPAの締結に成功しました。来年の1月1日からそれは実現することになっています。また、日本の投資が日本に入りやすい環境を設置することでモンゴル側も日本側も協力し、少しずつ結果が出ています。本格的に発展していくのはこれからです。大変楽しみにしています。それに関する話し合いやセミナーやフォーラムはウランバートル、東京、そしてそれぞれの国の地方でも盛んに行っています。今年も6月に東京で経団連との経済フォーラムがありまして、榊原さんを団長とする40名の日本のトップビジネスマンたちが8月にモンゴルに行きました。モンゴル投資フォーラムは東京、札幌、新潟、静岡、福岡、大分いろいろなところで行われています。次に皆さんの神奈川県でもやろうということを新聞社の方々と約束しました。来年からは両国の貿易、経済交流に新しい歴史が始まろうとしています。

3番目の柱は文化交流です。教育、市民団体と市民団体、地方と地方の交流の拡大です。70年代の末頃から、モンゴルからたくさんの方の留学生が来て日本の大学であらゆる専門を勉強しました。その人達が帰るとモンゴルの各分野において、大きな成果をあげています。今、日本に留学した政治家、国会議員は4人います。モンゴルに代議士は76人いますが、そのうちの4人が日本に留学しています。今、教育大臣が日本に留学しています。鉱山工業大臣も日本で勉強したかったそうです。日本で素晴らしい専門技術を覚えた人たちが、モンゴルの新しい国作りに貢献し役立っていることは大変誇りあることだと思います。これからもモンゴルの若い留学生をたくさん送りたいと思います。モンゴルの発展に行き着くために必要な専門、例えば建築、道路、橋、鉱山工業などの加工、電気製品など、日本の大学に5年間で1000人の技師を育成しようという約束を両国の政府の間にできまして、日本国政府の教育円借款を使ったということです。

また、今話し合っていますけれど5000人の若い人を技能研修生として日本に送りたい。今、日本は東京オリンピックの準備で海外からたくさんの方の研修生を受け入れると言っています。先ほど言ったあらゆる専門で、2年から3年勉強してもらって、帰った段階で合弁会社や日本とのグループでいろいろな事業を起こす人材を作っていきたいと思います。今、両国の関係の中では文化交流が大きな意義を持っています。70年代の初め頃から文化交流が始まりました。民謡、歌舞団など様々な民族的文化の紹介を毎年お互いにやってきたのです。社会主義時代の大変な時期にも文化交流プログラムを2年ごとに行い、映画祭、展示会など留学生の交流をしていましたが民主化されて以来、幅が広がっています。

スポーツ関係も交流が盛んです。1番話題にされているのは相撲です。モンゴルから相撲をする若者たちがやってきたのは1990年のことです。ティグレフォーラムの方々が挨拶をしていましたが、ティグレを作った上田卓三という衆議院の素晴らしい先生がモンゴルの若い人たちのために日本の相撲への道を作ってくれました。それ以来、一番多い時は57名の関取が相撲を取ろうとモンゴルから来ていました。今は少し数が減って23名でそのうち10名くらいが幕内で頑張っています。相撲の話だけでなく他の文化交流もそうですが、日本とモンゴルの人々がお互いを知り合おうとする意味で大きく貢献したと思います。朝青龍が大関、横綱になっていた頃、当時モンゴルの大きなテレビ局7つ全てで相撲が生中継され、男性の半分はテレビの前にいました。モンゴル市内は交通が大変渋滞するのですが、その頃はスイスイでした。ところで残念ながら最近関心が落ちてきました。日本の伝統・文化である相撲で日本人が頑張って優勝して、横綱になっていくのは当然ではないか。今、モンゴル人同士で争っているのは面白くない。早く日本の強い横綱が誕生してほしいと皆さん思っています。モンゴル人が1番好きな力士は魁皇関です。身体つき、顔つきがモンゴル人に非常に似ており、また彼が5回優勝しても横綱になっていないところをモンゴル人は惜しいと思っていました。今度こそ2回連続で優勝して横綱になって欲しいと思っていましたが、残念ながら実現しませんでした。最近稀勢の里に拍手しています。運の悪い人なのかまだ優勝していません。でも、戦後の日本の青年たちは身体つきが大きくなり、力を持っている青年たちもいっぱい出てきていますので、自分の伝統文化を大事にして優勝して、強い横綱が誕生する時期がくると皆さんが言っています。

後は、日本とのスポーツ交流のおかげで最近モンゴルは柔道が強くなりました。北京オリンピックではチャンピオンも誕生しました。世界選手権でも金、銀、銅メダルを取る選手が出ています。日本との交流の賜物です。スポーツ交流が広がっていますが、モンゴル選手団が、地理的に近い直行便で来られることを利用して、いろいろな分野に挑戦したいと考えています。事前に2、3回ほど日本で練習や合宿を行いたいとも思います。新潟、静岡、栃木などにモンゴルの選手団たちが合宿する契約も次々にできています。東京オリンピックは楽しいオリンピックになると思います。

安倍首相が5月にモンゴルの大統領と夕食をしたときに言った言葉があります。もし、東京オリンピックに相撲を入れることに成功すれば、それはモンゴルと日本の選手が争うことになりすねという話がありました。でも、私の考えは反対です。相撲はスポーツというより伝統文化です。それを、大事にして相撲独特の味がみんなで見ることができる、そして感動する伝統と文化であって欲しいと思います。

そして、市民団体と市民団体との交流も非常にうまくいっています。モンゴルでは日本と友好交流している市民団体の数は30以上あります。日本では北海道から沖縄まで79団体です。こういう、文化交流、スポーツ交流、市民団体の交流は両国民がお互いのことを知り合い理解し合うために大きな役割を果たしていると思いますので、これからも力を入れていきたいと両国政府は頑張っております。そして中央政府同士だけではなくて、地方都市との交流を拡大するために力を入れております。先程言ったとおり、10以上の各県とモンゴルの各県とが姉妹提携をして交流をしている最中であり

ます。これから広めていきます。その中に、神奈川とウランバートルが入っています。まだ具体的な交流までは備えていませんが、文化交流、貿易、観光経済交流、一般の人々の交流を中心に神奈川ともやっていきたいと思っており、それに対するセミナーや説明会をやっております。近いうちにモンゴルのウランバートルの首都で神奈川の文化祭をやりたいということを神奈川新聞社の方々と話をしました。また沖縄でもいろいろなイベントをたくさんやっていますので、それにもモンゴルが参加して交流を深めていきたいです。横浜のモンゴル留学生は少なくありません。市民団体と組んでやっていけば良い交流ができると思っております。

そして最後に、国際舞台で両国お互いを支持しあう関係が強化されています。モンゴルは日本の国連安保理常任理事国加盟を最初から支援した国の一つです。今もそれを強く主張しています。戦後の日本は平和国家に生まれ変わりました。地域グローバルレベルでの国際平和と安定を強化するために、日本は貢献できる国になりました。従いまして、国連の安保理の常任理事国になるべきだとモンゴルは主張しました。日本はアジア太平洋地域で行われている政治、経済、安全、様々なインテグレーションの過程、成り行きにモンゴルが参加できるように支援しています。エリアのメンバーシップを日本は注視しており、エリアのメンバーになったら東アジア首脳会談にモンゴルが参加できる道が広がります。次のステップとしてAPECの加盟という目標をモンゴルは立てていますが、日本は積極的に協力してくれます。そして、国連で審議されているグローバル的地域の様々な問題について、モンゴルと日本は情報の提供や意見の交換、立場の調整などで協力しあっています。わずか20年、30年前に日本の皆さんはモンゴルのことを地理的に近くても遠い

国と言っていました。今日は近くて親しい国に生まれ変わっていることが幸いです。私は両国の発展に小さいながらも参加出来る人物として嬉しく大変誇りに思っています。そういう話をできるだけ日本の皆さんに届けるのが私の義務であります。今日はこんなにも多くの人に集まっていただき、私の話を聞いてくれたことに心より感謝と敬意を申し上げます。ありがとうございました。

(斎藤先生) 大使ありがとうございました。私の方の思いを言うと、時間がどんどん限られてまいりますのでお話ししませんが、民主化された中で殆どの期間を大使は日本とモンゴルのための外交官として、ずっとモンゴルにいるときからもそういう任務に就かれました。先程EPAの8年間というお話がありましたが、非核地帯もまさに外交努力でこれも8年間かかっています。民主化した直後に、国連で当時の首相が演説した後でしたが、一国だけの非核地帯はかつてありませんでした。この事については凄い努力をされた国であります。今日は本当にありがとうございます。

それではお約束通り、学生さんでも結構ですのでどなたでもご発言、ご質問ある方は遠慮なく手を上げてください。

(質問者1) 神奈川大学の経営学部の新井と申します。今日は貴重なお話ありがとうございます。大使が仰っていた通り、モンゴルと日本は良きパートナーであると、それは自分も実感してまして、これからもモンゴルとの良いパートナーシップを築いていけると僕は思っています。というのも、僕の家でモンゴルの留学生を受け入れたことがあって、僕の妹と弟がモンゴルの方に留学生として行ったという経験があったからです。実際に自分の家に来ていただいたモ

ンゴルの留学生は日本だけでなく日本人の評価もものすごく高いものでした。そこで、質問ですが、モンゴルの方々から、大使から見た日本人の評価できる部分は具体的にどういう部分か聞きたいので教えて下さい。

(大使) まず、全体的には先程言ったとおり、日本国に対する3つのKを言っていました。日本人は、非常に仕事に熱心で勤勉である。日本人は嘘をつきません。日本人は仕事に真面目でそういう政策を持っている。そして、高い独特の文化を持っている。日本の文化に対する興味も高くなっていますね。唯一の欠点は行動が少し遅いことです。検討しているだけで時間が掛かる。じゃあ、日本じゃやりたくないと言ったらはいやりましょうと言ってくる。でも、良い点は約束した以上はちゃんとやる。約束を守るといふふうに評価していますね。

(斎藤先生) 遅いということで、民主化されて日本との援助を評価していただきましたが、大統領は私が参議院の時に議場で演説されました。貴方たちの支援で民主化していろいろやりました。しかし、目覚ましは鳴りっぱなしです。日本の皆さん起きてください。いつまで目覚ましを鳴らしているのですか。周辺の国々はモンゴルに来て様々な投資などしているじゃないですかと。あなたの国はいつ来るのですかということを経済の大統領が参議院の議場で言いました。それで、僕が何年前に大統領と私邸でそういう話をした時、遅いというのはそんなことだなと思って思い出しました。

(質問者2) 大使、私は神奈川大学の経営学部教授の田中です。今日は大使の本当に格調の高い、理路整然としたお話を大変感謝して伺いました。ありがとうございます。大使、2つ質問があります。1つは、石炭、鉄鉱石などの豊富な鉱物資源が日本に入ってくるルートがまだない。どうしても、鉄道網は中国を通過してからでないと運べない。ロシアを通過して、日本海から日本に運ぶこともご検討されているとNHKのスペシャル番組で聞いたのですが、大使のお立場だと難しいかもしれませんが、中国との距離のとり方、ロシアとの鉄道網の敷設、日本海から日本への貿易ルートの構築の可能性について教えていただけたらというのが1つです。そして、今日は日本人の学生が10数名来ていますが、大使のお立場からこれから社会人になっていく日本の若い学生に対して、モンゴルのこういうところを知ってという何かメッセージがあれば教えていただきたいです。私の大学院生でも、ラハグア・バリアさんという研究生が1年間おりました。今モンゴルに帰って頑張っておりますけど、本当にモンゴルとの距離を近くしていきたいと思っております。学生に向けて何か教えていただけたらありがたいと思っております。

(大使) 海に出口のないモンゴルということは、今の質問との関連で我々の1番の悩みの1つです。数多くの豊富な鉱物資源をそのままできた製品というかたちで、どんどん海外へ、その中で、我々が期待している日本へ輸出したいのです。日本は、石炭、コークス、レアアース、銅、モリブデンなどをたくさん輸入したいと考えています。問題はトランジット輸送です。それをどうするかについてモンゴルはロシアと話し合っています。1年前に中国の習近平主席がモンゴルを訪問しました。その時は、トランジット輸送に関する協定を作りましたが、中国は東北鉄道、そして海に出る8つの港をモンゴル

は利用していいとされました。そして、関税タリフのことでモンゴルの輸送品を4割のディスカウントを可能とし、減らない場合には、中国がモンゴルへの輸出品に割引をするという内容の協定を結びました。それを、具体化するために中国の関係省庁、モンゴルの省庁の間に具体的な話し合いを行っています。まだ、時間が掛かりそうですが、近いうちにそういうルートが中国経由でできます。

また、同様の交渉をロシアともやっています。シベリア鉄道、満州の鉄道を通じ、極東にでる港を使うということで話し合いをしています。しかし、中国と比べますと若干問題があるため話し合いの最中であります。モンゴルでは鉱物資源の開発が始まろうとしている時期ですが、国内で中国とロシアの鉄道につながる国内鉄道を作り、3つの段階に分けて実現していくことを考えています。それに日本を始めとして、韓国、アメリカ、カナダ、オーストラリアも協力することを提案して今話し合っています。日本の住友商事がモンゴルの石炭を大量に輸入する交渉に成功して、中国経由で先月200トンぐらいの石炭を中国経由で持ってきました。その経験に基づいて、今度中国とは日本とモンゴルが一緒になって話し合い、そういう通路を作ろうとしている最中であります。

若い留学生の皆さんには、まず日本を愛し、日本の伝統文化を大事にする。そして、世界の文化も理解できる。そういう青年になって欲しいです。日本とモンゴル関係では、何らかの参加・貢献をできる方々になって欲しいと思います。

(齋藤先生) ありがとうございます。相撲のお話が出ましたが、今日は神奈川県レスリング協会の理事長がきています。このまえの世界選手権で、わが国の選手はモンゴルの選手に滅茶苦茶に負けてしまいました。恨み辛みを言うわけではありませんが、理事長一言ありますか。

(質問者3) 私も13年間、ウランバートルの方に参りまして、アジア選手権で大変お世話になりました。幸い神奈川でも女子が1名優勝してカップを頂いて参りました。ウランバートルの町では、子どもたちを色んな所に連れて参りました。文化的な部分がどんどん活発になると思いますが、子どもたちもモンゴルを始めイラン、北朝鮮、中国、インド、キリギスの辺に集まって交流し、国際理解を深めたのではないかと考えております。特にレスリングはモンゴルとの交流が盛んですので、今後もさらに経済発展と同じように文化・スポーツの交流をさせていただければと思います。いろいろありがとうございます。

(大使) モンゴルが初めてオリンピックに参加したのは東京オリンピックです。オリンピックで初めてメダルを取ったのがレスリングで、東京オリンピックでは白鵬のお父さんが参加していました。その時はメダルを取っていませんが、次のメキシコオリンピックで銀メダルを取っています。白鵬は20年の東京オリンピックにお父さんと一緒に参加し、オープニングセレモニーのときは土俵入りをしたいという夢を持っているそうです。

(齋藤先生) ちょうど大使からティグレの上田元会長の話をしていた
いただきました。私も市議員になる前から上田会長とは親しくさせて
頂きました。ティグレとお付き合いし、巡り回ってモンゴル出身の
旭天鵬関が優勝したときに総理大臣杯を私が国技館で渡したのも何
かの縁だなと思います。そして去年またモンゴルに行きまして、今
日も社団法人勁草塾監事の丸山さんもきていますが、私と丸山さん
と元総理の野田さんと一緒にモンゴルに行った時、帰りの飛行機の中
で旭天鵬関の妹が前にいてあら齋藤先生とびっくりしていました。
それも今ティグレの方で働いています。大使は早朝から都内で仕事
が入っており、今日は交流会もと思ったのですが、この時間で終了
とさせていただきたいと思います。先程、田中教授の質問のなかで
若い学生さんにと言われましたが、若い学生さんだけではなくて私
たち中高年も人生ある限り母国を愛し、そしてまたさらに他国を愛
していきたいと思います。本当に素晴らしい多言的と申しますか中
立というスタンスをとることで、モンゴルの今の外交の姿を日本は
もっと学ばなければならないと思いました。もう一度、私たちも母
国を愛し、他文化と共生していくような社会にしていかなければな
らないと思います。安倍さん頑張ってくださいとは言いませんけど、
言ってもいいんですけどみんなで頑張りましょうということになる
と思います。本当に長時間ありがとうございました。神奈川新聞社
様からもご後援頂きました。神奈川新聞社さんには、これからいろ
いろなフォーラムでモンゴルとの関係を企画していただきたいと思
います。そして来年、再来年かはわかりませんが、神奈川新聞社主催、
一般社団法人勁草塾共催でモンゴルへ行こうということもあればと
思います。大使本当にありがとうございました。皆さん大きな拍手
をお願いします。

(文責・勁草塾編集部)